

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

年 月 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 工学研究科・建築学専攻

職名・学年 博士後期課程2年生

氏 名 DRIDI WADDAH

助成の種類	令和5年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	ACUUS 2023 - The 18th World Conference of the Associated Research Centers for the Urban Underground Space			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Rethinking the role of Underground Architecture in contemporary Japan : Project trends observed in Shinkenchiku Magazine (2000 - 2020)			
開催場所	シンガポール共和国. シンガポール The Suntec Singapore Convention & Exhibition Centre			
渡航期間	2023年 10月 31日 ~ 2023年 11月 05日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円		
	使用した助成金額	150,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金 額 (円)	
		航空運賃	72,660	
		宿泊費	56,701	
		滞在費(or日当)	20,639 (25,000)	
学会参加費		0 (50,120)		
その他	0 (26,920)			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 将来的に一つ提案させていただきたいのは、英語での申請書類を提供していただければ、日本語を話せない学生もこの助成金に応募できるようになるかと思えます。私の日本語のレベルでは申請書を完成させるまでに非常に時間がかかりました。外国人学生が助成金を知らないのは、告知が全て日本語のためです。			

成果概要 / DRIDI WADDAH

工学研究科 建築学専攻 D2

06 / 11 / 2023

私は、京都大学教育研究振興財団の助成を受け、400名以上の参加者と共に ACUUS 2023：第18回都市地下空間研究センター連合会議に出席する栄誉を得ました。この機会に対する深い感謝の意を表します。

「新たなフロンティア」をテーマに、世界各国から多様な専門分野の著名な話者が一堂に会しました。講演では、地下空間の開発と計画に関する貴重な知見が共有され、多くの専門家と交流し、今後の共同研究の基盤を築くことができました。

私が発表した論文「Rethinking the role of Underground Architecture in contemporary Japan: Project trends observed in Shinkenchiku Magazine (2000 – 2020)」は、技術的およびインフラストラクチャ/エンジニアリングの側面よりも、地下建築の理論と概念により焦点を当てています。この日本の地下建築（UA）に関する包括的な調査では、2000年から2020年までの「新建築」雑誌に掲載された4613件のプロジェクトを精査することで、地下建設の歴史的傾向と現状を分析的に解き明かしています。この研究で明らかになった結果は、一般的な見解とは異なる複雑な実態を示しています。UAが高密度都市のソリューションと主に関連付けられている伝統的な視点に反して、地下開発を採用しているプロジェクトは全体のわずか1%であることが分かりました。特筆すべきは、UAのタイポロジーが単なるインフラの有用性を超えて多様化していることです。文化的、教育的、そして娯楽的な空間がUAの主要な機能として浮上し、地下建築のより概念的な利用に向けた変化を示しています。これらのプロジェクトの地理的分布は、UAが混雑した都市に限定されているという仮定にさらに疑問を投げかけます。プロジェクトのほぼ半数が都市部や密度が低い設定に位置しており、都市の制約による強制ではなく、意図的な建築的選択を示しています。単一のソースに根ざしているとはいえ、この画期的な研究は、日本が地下空間を使用する戦略的および美的動機についての深い問いを喚起し、その環境的文脈と調和した建築の未来を再考する道を開いています。

38歳以下の若手学者向けのセッションにおいて、私の論文は100以上のノミネート作品の中から発表され、最優秀若手学者論文賞を受賞しました。

発表論文はSpringerのLecture Notes in Civil Engineeringに掲載される予定であり、さらにTunnelling and Underground Space Technology (TUST)やUnderground Space Journal (US)などのジャーナルへの掲載が推薦されています。

再度、貴財団のご支援に感謝申し上げます。今後とも研究の進展に向けてのご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。